かかみがはら
百科+
Kakamigahara Encyclopedia PLUS

ドラマチック木曽川 ―百奴生誕150周年―

スマートミュージアム Kakamigahara

かかみがはら 百科プラス 2022 No. 02

令和3年度企画展

川上貞奴と各務原

～日本初の近代女優が、各務原を終焉の地としたのは～

第１章　日本一の芸妓「奴」から日本初の近代女優「貞奴」に

1. 葭町一の売れっ子芸者「奴」

貞奴（写真1）は、明治4年（一八七一）7月18日、小山久次郎の12番目の子として東京で生まれました。名前は、貞。貞の生家であった小山家は、かつては両替商を営む大店だったのですが、維新後の混乱で家業は倒産。そのため、貞は7歳にして日本橋葭町の芸者置屋、浜田屋の女将・可免の養女となります。貞は、私塾に通いながら芸事に打ち込み、明治16年（一八八三）、12歳で雛妓になって「小奴」を名乗りました。

明治18年（一八八五）のある日、千葉県の成田山まで馬に乗って参詣に出かけた帰り道、貞は野犬の群れに襲われます。そのとき、ひとりの青年が棒切れと石で野犬を追い払ってくれました。青年は、慶應義塾の岩崎桃介（写真2）。このときから、貞は桃介と交際するようになります。しかし、それから1年ほどして、桃介は慶應義塾の塾長・福沢諭吉の次女・房と婚約し、留学先のアメリカへ旅立ちます。貞の初恋は、実ることはありませんでした。このとき、貞は15歳、桃介は18歳でした。

明治20年（一八八七）、16歳になった貞は、初代内閣総理大臣の伊藤博文が後ろ盾となり、「奴」と名乗るようになりました。このとき、伊藤博文は46歳でした。才色兼備の誉れが高かった貞は、井上馨、井上毅、黒田清隆、西園寺公望らが贔屓筋になり、葭町一の売れっ子芸者になりました。

その後、明治27年（一八九四）、「オッペケペー節」で一世を風靡した新派劇の創始者、川上音二郎と結婚し、芸者の世界から離れます。このとき音二郎は30歳、貞は23歳でした（写真3）。

写真３　音二郎と貞の結婚写真（川上新一郎氏提供）
貴族院議員金子堅太郎が仲人となって、音二郎と貞は結婚した。

写真２　若き日の桃介
（成田山貞照寺提供）

写真１　芸者の頃の貞奴
（成田山貞照寺提供）

2. 女優貞奴の誕生 ヨーロッパで貞奴旋風

音二郎の新派劇は大評判でしたが、新劇場「川上座」建設のための借金が嵩み、日本で興行を打つことが困難になったため、明治32年（一八九九）4月30日、川上一座は新天地を求めてアメリカに向かいました。

5月23日、一行はサンフランシスコに到着。既にポスターには一座の看板女優として貞が宣伝されていました。日本の歌舞伎では、女役は男の女形が演じていましたが、欧米では女役は女性が演じるのが当たり前で、男性が演じるのは気味悪がられていました。貞は自分が役者になろうとは思っていませんでしたが、仕方なく女優となることにしました。芸名は「貞奴」。日本初の近代女優の誕生です。

川上一座は途中、興行主に売上金を持ち逃げされてしまうというトラブルに遭いますが、アメリカでの公演は好評を得、貞奴はニューヨーク婦人倶楽部の名誉特別会員として表彰されました。その後、大西洋を渡り、イギリス公演で成功した一座は、明治33年（一九〇〇）6月、パリに到着。パリ万博開催中のロイ・フラー劇場で公演しました（写真4）。

川上一座の評判はエリゼ宮まで聞こえ、8月19日、ルーベ大統領は宮殿で園遊会を開き、一座を招待しました。一座は『道成寺』を公演し、多大な喝采を受け、貞奴は人気を独占しました。大統領夫人はわざわざ貞奴に握手を求め、庭内を一緒に散歩したほどでした。これによって、貞奴は一躍パリ社交界のトップレディに押し上げられました。

パリでは、人々が川上一座の台詞を日本語で真似ることが流行し、一大センセーションが巻き起こりました。ヤッコ服が流行し、「ヤッコ」という香水も発売されました（※1）。アンドレ・ジイド、イサドラ・ダンカン、ピカソなども貞奴の演技を絶賛しました（※2）。

貞奴は、フランスのサラ・ベルナール、イギリスのエレン・テリー、イタリアのエレオノーラ・ドゥーゼなど、ヨーロッパの一流女優と並ぶ、あるいはそれ以上の名優と称えられました。

『ル・テアトル』の表紙を飾る貞奴
（成田山貞照寺蔵）

ロイ・フラー劇場で『芸者と武士』を演じる貞奴。欧米の雑誌で初めて表紙を飾った。明治33年（1900）10月。

写真４　ロイ・フラー劇場の川上一座『芸者と武士』（成田山貞照寺蔵）
左より名古屋山三を演じる音二郎、左から３番目が芸者を演じる貞奴。

ピカソが描いた貞奴のデッサン画
（複写成田山貞照寺蔵）

※２　19歳のパブロ・ピカソ（1881～1973）は、1900年、万博開催中のパリにバルセロナから来ており、川上一座と接触があった可能性が指摘されている。川上一座が翌年ロイ・フラーと再契約してパリに滞在しているときにも、ピカソは再度パリを訪れていた。この欧州公演の最後にスペインに立ち寄った川上一座は、バルセロナで地元の画家たちと接触していたことが明らかになっている。ピカソがポスター制作を依頼され、貞奴を描いたとされる素描が3点あったことが知られている。

第１回パリ公演で貞奴に贈られたペナント
（成田山貞照寺蔵）

※１　明治33年（1900）、パリ万国博覧会ロイ・フラー劇場で、川上一座は7月4日から11月3日まで123日間休まずに公演を行った。この博覧会で花形となった貞奴は、ほかにも夜会、新聞、雑誌に引っ張りだこで、超人的なスケジュールをこなしていた。11月5日には、フランス政府より「オフィシェ・ダ・アカデミー」に叙された。ヤッコ・ドレスやヤッコと名のついた香水も現れ、貞奴はパリで一大ブームとなった。貞奴29歳。

3．女優養成所の開設

帰国後、音二郎は相模湾に面した茅ケ崎に約三千坪の松林を手に入れました（写真5）。やがて松林の中に和洋折衷の新居を建て、伊藤博文によって「萬松園」と名付けられました。

貞奴は帰国後女優を続けるつもりはありませんでした。役者蔑視と女性蔑視の強い日本で女優になることは、難題だったからです。しかし、その貞奴を音二郎は拝み倒し、『オセロ』に出演することを承知させました（※3）。

その後、川上一座の正劇は、『ベニスの商人』『ハムレット』などの成功を経てその地位を確立し、貞奴も女優としての評価を高めていきました（写真6）。

写真5　茅ヶ崎の音二郎と貞奴
明治36年（1903）
（川上新一郎氏提供）

明治41年（一九〇八）6月、近代演劇の発展と女優の地位向上を願い、貞奴は女優養成仮事務所を開設します。帝国劇場株式会社は、貞奴の女優養成所に創立賛助費と補助金を出すことを決め、名称は帝国女優養成所と定められました。養成所には、予想を上回る応募者があり、森律子ら15人が採用されました。同年9月15日の開所式では、渋沢栄一（写真7）、大倉喜八郎、福沢桃介など帝劇重役陣と各新聞の演芸記者を来賓に迎えて、貞奴が挨拶に立ちました（※4）。

写真6　（左）『ベニスの商人』/（右）『ハムレット』　明治36年（1903）
（成田山貞照寺提供）

※3　『オセロ』の初演は、明治36年（1903）2月11日、東京の明治座で行われた。音二郎と貞奴が2回目の欧州巡業から帰国した後の上演である。東京、関西におけるほぼ1か月の上演は連日大盛況で、「洋行帰り」の宣伝に惹かれて集まった観客は、欧米の人々をも魅了した「日本の近代女優第一号」の貞奴の姿に熱い視線を注いだ。

『川上音二郎来歴談　附オセロ六幕』
（演藝之友）付録　藤見一郎編
明治36年（1903）
（成田山貞照寺提供）

渋沢は、「日本で300年来賤しむべからずして賤しまれていたものが三つある。商人と婦人と俳優である。うち商人だけは、我々の力によって今日では先ず賤まれぬ地位に上す事が出来たが、婦人と俳優はまだそういかぬ。その賤まれる婦人であってしかも賤まれた俳優になろうというのだ。我々実業家も昔は賤まれた同士であるだけ他人事とは思わぬ。表へ出ないで家内に引っ込んでいて転ばないのは当然で、足駄を履いて表へ出ても尚躓かないのが、真に転ばない人である。」と励ましました。

写真7　渋沢栄一（1840-1931）
（『帝劇10年史』大正9年4月発行より転載）

渋沢栄一は、大倉喜八郎、福沢桃介、西野恵之介、益田太郎らと帝国劇場開設の発起委員長となり、その後重役となった。

※4　欧米公演で、女優養成の必要性を感じた貞奴は、帝国女優養成所を創設し、自らがその所長となった。

「女優養成所の所長と其の生徒」ポスター（成田山貞照寺蔵）

音二郎追善興行『トスカ』の貞奴
大正2年（1913）6月
（成田山貞照寺提供）

※5　貞奴は、明治45年（1912）2月を振り出しに、京都・東京・名古屋についで西日本各地を回った。その後、朝鮮に巡業に出て、翌大正2年（1913）1月に戻った。

同年6月には、帝国劇場で『トスカ』を上演し、「努力懸命の舞台、芸の力を見せた」（『報知新聞』）、「活き活きとした舞台」（『時事新報』）、「際立っていい」（『読売新聞』）、「努力の賜物」（『横浜貿易新報』）と報じられるなど、女優として高く評価された。

4．音二郎の死と女優引退

明治43年（一九一〇）2月27・28日の両日、川上夫妻個人経営の大阪帝国座の舞台開きが催されました。しかし、翌44年（一九一一）になると、音二郎は体調を崩します。やがて、音二郎は舞台にも立てなくなり、11月11日に病院から帝国座に移され、一時間後に息をひきとりました。享年47歳でした。貞奴は、追善興行のため、西日本各地を廻りました（※5）。いつしか川上一座は貞奴一座と呼ばれるようになりました。

大正6年（一九一七）9月、貞奴は引退声明を発表しました。音二郎の七回忌を機に、健康がすぐれないので辞める、というのが引退の理由でした。貞奴は、引退興行として10月、東京の明治座で『アイーダ』と『雲のわかれ路』を演じました。

「兎も角も隠れ住むべき野菊かな」

―貞奴は、この句を白磁の茶碗に藍色で焼き付け、引退興行の配り物としました（写真8）。このとき貞奴、46歳でした。

音二郎追善興行の絵葉書
（成田山貞照寺蔵）

（裏）

（表）

貞奴引退の挨拶状（成田山貞照寺蔵）

兎も角も　隠れ住むべき　野菊かな

健康がすぐれないためというのが表向きの引退の理由だったが、音二郎の死後、貞奴がどれだけ評価を受けても、女性や俳優が賤しまれたこの時代、彼女を尼寺に追いやろうとする声が消えることはなかった。

この茶碗に焼き付けた「兎も角も」という表現は「よりどころなく」という意味を含み、貞奴の悲しみのうずきを秘めている。

ひっそりと咲く「野菊」は、華やかだった舞台姿からは想像できないが、この頃の彼女の心境を表している。

コラム COLUMN　岐阜にも来た貞奴一座

大正3年（1914）5月12日を初日として、岐阜美殿座で、貞奴一座の『トスカ』『照手劇』『夜の鶴』の公演がありました。5月13日付の岐阜新報は、「トスカ劇は高尚すぎて田舎向きではない」と評しています。貞奴一座は翌大正4年にも来岐し、『サロメ』『八犬伝墨高楼』を公演しています。

岐阜美殿館　大正13年（1924）
※大正12年に美殿座から改名
（岐阜土地興業株式会社提供）

写真8　貞奴引退記念の茶碗
（成田山貞照寺蔵）

第２章　桃介との木曽川電力開発物語

1．二葉御殿

貞奴は音二郎亡き後、桃介と急接近します。桃介は貞奴の初恋の人であり、支援者たちの中でも誰にも増して愛情深く、よく支援してくれていました。桃介はこの頃、木曽川電力開発事業という壮大なるプロジェクトを抱えており、そばにいて支えてくれるパートナーを必要としていました。

大正8年（一九一九）、名古屋市東二葉町に完成した二人の新居は、赤い洋瓦を屋根にいただいた威風堂々たる姿で、夜になっても庭園に置かれた照明によってライトアップされ、あたりを圧倒しました。そこには、電気を使った生活がどんなものであるかを知ってもらおうという桃介の狙いもありました。貞奴はその家を二葉居と名付けましたが、その豪華さから人々は「二葉御殿」（写真9）と呼びました。

表札には、「川上貞」とあり、貞奴と桃介、貞奴の養子の広三と養女の富司、桃介の孫の直美、その他に執事と小間使い10人、書生、下働き、女中頭、コックなど20人を超す大所帯でした。

外出には黒塗の馬車か自動車を用い、白狐の外套やストールを身にまとっていました。馬車の御者は、金モールの服を着ていました。さながら宮様のお通りのようであったといいます。自動車は、日本に2台だけ輸入された米国車のパッカードでした。二葉御殿は、福沢桃介と川上貞奴の事業本部ともいうべき存在で、その華々しい活動の拠点でもありました。

二葉御殿には、政財界人が多く集まり、その接待を仕切るのは貞奴でした。桃介は、結核を患って以来、酒もたばこも飲まず、歓談が続いても、夜10時には就寝します。あとは貞奴が引き受けました。

貞奴は一人の時間ができると、南画を描き、習字の練習をしました。南画は成木星州に、書は後藤半仙に習って、「香葉」と号しました。

二葉町時代は桃介の最盛期であり、実業家として第一線で活躍した最後でもありました。桃介が貞奴という絶好の相手役を得て、思いの丈を尽くした人生のフィナーレでした。

二葉御殿では、1階の大広間で連日のようにパーティーが催された。ワインカラーのじゅうたんを敷き詰めたこの螺旋階段を貞奴が2階から下りて華々しく登場すると、人々は拍手を送った。

１階から２階につながる螺旋階段

写真９　二葉御殿
（現：文化のみち二葉館）

杉浦非水（桃介の妹婿）原画。宇野澤スティンド硝子施工。図案は、竜田川にもみじ。もみじは貞奴が好んで使った自分の印である。

ステンドグラス「もみじ」

2．桃介の木曽川水力発電事業

福沢桃介は、明治28年（一八九五）10月、北海道炭鉱鉄道の石炭主任として働いていたとき、結核となり、会社を辞めますが、入院中に千円を元手にして相場で十万円儲けます。さらに、日露戦争後の株式ブームでは、当時の金で二百万円ほども儲けたといいます。

株で財を成した桃介は、実業界に進出します。全国を旅行して歩き、これはと思う事業に出資し、着々と事業を広げていきました。そして大正3年（一九一四）、名古屋電灯（株）の社長に就任した桃介は、木曽川の水力発電事業に乗り出します。木曽川は、水量が豊富で勾配も急であり、水力発電を行うのに絶好の条件を備えていました。桃介は、本業の水力発電所計画はもとより、電気を使う事業を増やすために、電気鉄道の会社をさかんに作り、電気製鋼所、電気製鉄所なども次々に設立させました。電力需要が多い関西方面に電力を送るため、大阪送電という送電事業会社も設立しました。そして、大正9年（一九二〇）、桃介を社長とする大同電力を設立します。

桃介は、木曽川の発電所建設工事の前線基地として、前年の大正8年（一九一九）、中央線の三留野駅の対岸に「大洞山荘」（写真10）を建設していました。ここで桃介と貞奴は、外国人技師など絶え間なく訪れる来客をもてなしました（写真11）。

桃介は、賤母発電所を皮切りに、大桑発電所、須原発電所（写真12）、桃山発電所、読書発電所と、木曽川に次々と水力発電所を建設していきました。これらの発電所は、ライン川沿いの古城のように、芸術性の高い魅せる発電所として設計がなされました。須原発電所には、桃介がドイツから持ち帰った三色桃が植えられ、日本の三色桃発祥の地となりました。桃山発電所には余水吐（発電所の停止時や使用水量以上の流入時に取水を河川に戻すための施設）を利用した隠れ滝が造られ、「桃之滝」と呼ばれました。読書発電所では、資材運搬のための橋を、わざわざ川幅の広いところに架けさせ、「桃の橋」と名付けました。しかし、人々は「桃介橋」と呼びました（写真13）。

写真 12　三色桃が美しい須原発電所
大正 11 年（1922）竣工 / 近代産業遺産

写真 11　大洞山荘の桃介と外国人技師たち
（関西電力株式会社東海支社提供）

写真 10　大洞山荘
（現：福沢桃介記念館）

桃介と貞奴
（川上新一郎氏提供）

写真 13
桃介橋渡り初めのときの
桃介と貞奴　大正 11 年 9 月
（関西電力株式会社東海支社提供）

左端の帽子の男性は桃介、傘を持つ女性は貞奴。福沢桃介別荘由来には、「大正12年12月桃之橋の架橋も成り翁は川上貞奴を伴いよく来荘し地元の人たちと木曽踊りの夕べを浴衣姿で楽しむなど、全く気取ったところなく親しく交わった。」とある。

3. 電力王「福沢桃介」

大正11年（一九二二）7月に起工した「大井発電所」（写真14）は、日本初のダム式発電所で、桃介の木曽川電力開発事業の中でも最大かつ最難関の事業でした。「男伊達なら、あの木曽川の、流れ来る水、止めてみよ」と木曽節に唄われた木曽川でしたが、この川をせき止めるなど、かつては考えられないことでした。それだけに大きな反対の声が上がりましたが、桃介は反対者を粘り強く説得し、これからの水力発電は、ダム式でなければ大きな発電は望めないことを理解させました。桃介は、貞奴と共に現場を回り、体を張って作業員たちを鼓舞しました。

大正12年（一九二三）9月1日に起こった関東大震災は、大同電力を直撃しました。国内での資金調達ができなくなり、工事途中の大井ダムの建設は、先が見えなくなりました。そこで桃介は、アメリカで外債を発行して資金を調達すべく、大正13年（一九二四）5月、ニューヨークに向かいました。この地に3か月余り滞在した桃介は、苦労の末、この年千五百万ドル、翌年千五百万ドル、計三千万ドルの資金調達に成功します。そして同年11月、大井発電所はついに完成しました。この発電所は当時東洋一といわれる規模でした。

大井ダムでの桃介
（成田山貞照寺提供）

大正13年（1924）、アメリカから帰国後に大井ダムで撮影されたもの。

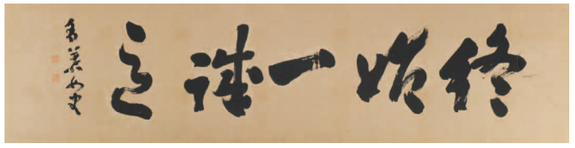
大井ダムでの記念写真
（関西電力株式会社東海支社提供）

写真 14　大井発電所 / 近代産業遺産

桃介揮毫の「普明照世間」

福沢諭吉揮毫の「独立自尊」

大井発電所にある桃介の言葉を刻んだ碑。電力開発によって「普く世間を明るく照らす」という桃介の思いを表したもの。なお、「独立自尊」と揮毫した福沢諭吉は、桃介の義父である。



貞奴の書「終始一誠意」（成田山貞照寺蔵）

貞奴は、桃介が大井ダムの外債募集に成功したとき、祝いに好きな言葉を書にしたためた。

大正15年（一九二六）12月には、落合発電所が完成しました。これにより、桃介の「一河川一会社」という理想が実現し、桃介は「電力王」と呼ばれるようになりました。政府は、桃介に勲三等旭日中綬章を贈りました。

4. 女優引退後の貞奴の夢

女優引退後の貞奴の夢は、何といっても桃介の木曽川電力開発事業を共に成し遂げることでした。さらに、貞奴には、それに加えて二つの夢がありました。一つは、子どもの頃から親しんだ絹織物の工場をつくること、もう一つは、児童劇団をつくることでした。

大正7年（一九一八）、貞奴は名古屋市東大曽根に川上絹布株式会社を設立しました。会社では、「奴めいせん」「奴きぬ」のブランド名で美しい絹を生産しました（写真15）。また、女工が働きやすいよう労働環境や福利厚生を整えました。

川上絹布の経営は順調に進むかに見えましたが、第一次世界大戦後の大正9年（一九二〇）になると、戦争景気は終わり、戦後不況が襲いました。川上絹布の経営は日に日に悪くなり、大正13年（一九二四）には廃業となりました。

大井発電所建設のめどがつき、川上絹布の経営も手から離れると、貞奴は前から心の中に温めていた児童演劇の活動を起こし、「川上児童楽劇園」を発足させました。そして、大正14年（一九二五）、二子玉川に養成所を新築しました。

養成所の辺り一面は、桃の花の林に囲まれていました。校章は桃であり、園生のバッジのデザインもまた桃でした（写真16）。楽劇園の評判は上々でしたが、桃介の体調が悪くなると、貞奴も楽劇園の陣頭指揮をとることが難しくなり、昭和7年（一九三二）に楽劇園は解散しました。

貞奴58歳（昭和4年）の写真
（成田山貞照寺蔵）

（裏）　（表）

写真 16　川上児童楽劇園の卒業記念バッジ
（文化のみち二葉館蔵）

写真 15　貞奴が川上絹布で作らせた特製の掻巻布団
（文化のみち二葉館蔵）

青海波に宝船という絵柄の掻巻布団。帆には、「電」の文字や貞奴の大好きな紅葉をあしらっている。川上絹布を設立したとき、貞奴は二葉居や大洞山荘で使う座布団や寝具、そして羽織を特別に作らせた。材質や意匠は、すべて貞奴の采配によるものである。

コラム COLUMN

「桃介の懐刀」と呼ばれた男
横山多賀治（各務原出身）

電力王福沢桃介と川上貞奴の悲願であった日本最初の本格的なダム式発電所、「大井発電所」建設。この建設工事を陰で支え、桃介の懐刀と呼ばれた男が各務原にいました。初代蘇原町長・横山多賀治です。

大井ダムの天端（ダムの一番高い部分）には、大井発電所建設に携わった13人の肖像レリーフが今も残っています。まさに大井ダムサーティーンともいうべき、建設工事の中心人物であり功労者たちです。社長福沢桃介、副社長増田次郎らとともに、多賀治のレリーフがそこにはあります。

横山多賀治
（横山信治氏提供）

多賀治は、明治18年（一八八五）8月、岐阜県各務郡大宮村（現各務原市蘇原大島町）に、横山忠三郎の四男として生まれました。父・忠三郎は各務用水を建設し、郷土の発展に尽くした人物です。

多賀治は、明治43年（一九一〇）、岐阜県庁に入庁後、大正4年（一九一五）には、知事官房主事となり、知事のすぐ傍らにいて県政を推進していくようになります。

多賀治が、桃介の引き抜きにより、岐阜県庁を辞めて木曽電気興業株式会社（後の大同電力株式会社）に入社したのは、大正8年（一九一九）のことです。

桃介は、木曽川の水力発電開発には、「開発計画、着工時から、地域との折衝に向き合う玄人の存在が必要である」と考えていました。多くの反対運動のため計画がとん挫した経験から、地域住民の協力を得ることがいかに大事か、身に染みて感じていたからです。

そこで、鉄道院総裁や逓信大臣を歴任した後藤新平に頼み、後藤の片腕だった増田次郎を入社させます。

副社長 増田次郎

社長 福沢桃介

総務係主任 横山多賀治

大井発電所の紀功碑裏面にはめ込まれた肖像レリーフ

大井出張所での桃介と貞奴、多賀治
（関西電力株式会社東海支社提供）

知事官房主事時代の多賀治
（横山信治氏提供）

稲葉郡地方改良功労者表彰式 大正７年（横山信治氏提供）

やがて、大同電力の副社長に就任した増田次郎は、地域との折衝をすべて取り仕切り、木曽川の電力開発は一気に加速していきました。この増田次郎とともに、国や県、地域との折衝に当たったのが横山多賀治です。多賀治は、今までの県庁勤務の経験と人脈を生かして、国や県当局への交渉と対応、用地の買収や地元住民への対応を大同電力の中心となって行いました。日本初のダム式発電所の建設のために、国や県、地域との折衝は、技術面・予算面ともに解決しなければならない困難な問題でしたが、多賀治はそれを見事にやり遂げました。

大同電力のダム式工事を報じる新聞
（大正11年8月16日 『濃尾日報』）（横山信治氏蔵）

多賀治のことを、「今は福澤桃さんのお気に入りで『大同電力の懐刀』とまで噂されている元知事官房主事の横山氏」と紹介している。

当時の新聞記事からは、社長福沢桃介の信頼が厚かったことを伺い知ることができます。また、多賀治がつけていた日記には、桃介や貞奴との交流の様子が記されています。貞奴と多賀治は親しかったようで、大正10年（一九二一）、多賀治の次女・眞子の誕生時には、貞奴からお祝いに直筆の掛軸が贈られています。

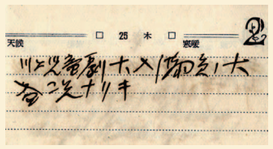
多賀治は、昭和14年（一九三九）、岐阜県稲葉郡蘇原村村長に就任し、蘇原駅開設など、蘇原村の発展に尽力しました。昭和18年（一九四三）には、初代蘇原町長に就任します。

昭和19年（一九四四）、貞奴が鵜沼の萬松園に疎開すると、多賀治は、貞奴のために食料品や不足していた物資を届けました。「淀君というのは貞奴みたいな人だったかもしれない。ビシッとしていた。」と多賀治は家族に話しています。

懐刀として桃介を支え、郷土の発展に尽くした多賀治は、昭和38年（一九六三）、天寿を全うします。享年77歳でした。

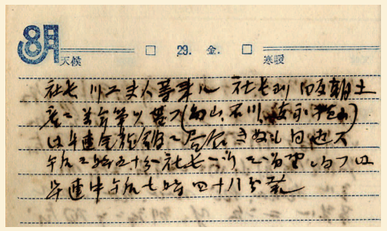
次女眞子誕生の折に、貞奴が多賀治に贈った直筆の掛軸
（横山信治氏蔵）

後藤新平から多賀治に贈られた書「会古通今」（横山信治氏蔵）


川上児童劇大入満員ノ大
盛況ナリキ

貞奴の川上児童劇を観劇し、大入り満員だったと書いている。

多賀治の日記　大正15年2月25日（木）
（横山信治氏蔵）


社長、川上夫人等来ル　社長ヨリ帰朝土
産二万年筆ヲ貰フ（畠山、石川、友永、横山）
岐阜連金龍舘デ昼食　きぬも同席ス
午後三時五十分社長一人三留野ニ向フ　岐
阜連中午後七時四十八分発

アメリカで外債募集に成功して帰朝した桃介が、貞奴とともに大井ダムを訪れた日のことが書かれている。土産に万年筆をもらっている。

多賀治の日記　大正13年8月29日（金）
（横山信治氏蔵）

多賀治と次女眞子
（横山信治氏提供）

第３章　貞奴 各務原へ

1. 金剛山桃光院貞照寺の建立

大正3年（一九一四）、今渡から犬山に至る木曽川下りを楽しんだ地理学者の志賀重昂は、この絶景がドイツのライン川に似ているとし、「日本ライン」と命名しました。この日本ラインが、昭和2年（一九二七）に新日本八景の河川部門一位になるなどして、観光地として脚光を浴びていました。

福沢桃介は、以前からこの景勝地が気に入って土地を購入していましたが、昭和3年（一九二八）7月、ここ鵜沼宝積寺地区に大遊園地を造るという計画を発表しました。結果的には、そのような壮大な計画は実現しませんでしたが、同様にこの地を気に入っていた貞奴は、桃介と鵜沼南町から鵜沼宝積寺地区の土地を購入しました。

晩年にさしかかった貞奴の念願は、不動尊を本尊とする寺を建立すること、そしてその参詣のための別荘を木曽川のほとりに建てることでした。

貞奴は人生の度重なる苦難の場面で自分を守ってくれた不動尊を深く信仰していました。また、鵜沼宝積寺地区は、桃介と共に電力開発事業を進めた木曽川の中流域にある景勝地です。桃介が建設した木曽川上流の発電所の水が、ここにも流れてきています。この地は、貞奴が桃介との思い出に浸りながら、人生の最後を過ごすのに絶好の地でした。

貞奴は、昭和6年（一九三一）に寺の建設に着手しました。大工は名古屋の宮大工・伊藤平左衛門でした。寺は金子堅太郎によって「金剛山桃光院貞照寺」と命名され、初代住職には元新義真言宗智山派管長・滝承天僧正を迎えました（写真17）。

昭和6年（一九三一）9月には上棟式が行われて、貞奴と桃介が臨席しました（写真18）。入仏式は、昭和8年（一九三三）10月28日に行われました。このとき桃介は体調がすぐれず、参加していません。

貞照寺は、貞奴が二葉御殿などの資産を処分して、すべて私財で建立しました。当時のお金で三十五、六万円かかったといいます。一個人が寺を建立するなど、なかなかできることではなく、貞奴は相当の資産家でした。

鵜沼不動尊全景（成田山貞照寺蔵）

写真 18　貞照寺上棟式　昭和 6 年 9 月（成田山貞照寺提供）
前列左から　2 番目が貞奴、3 番目が桃介

写真 17　貞奴と滝僧正
（成田山貞照寺提供）

貞奴を表すもみじ

桃介を表す桃

貞照寺山門の木鼻に施された彫刻

貞照寺を歩く貞奴（川上新一郎氏提供）

2. 八霊験絵図

貞奴は、自らの人生で、不動明王から守られたと信じている八つの場面を画家の岡田如竹に描かせ、それを木版に彫らせ、参拝者が見られるように本堂回廊の外壁にはめ込みました（写真19）。

第一面は、貞奴が雛妓になって間もない冬、養母・可免の難病を救いたいがために、水垢離をしている場面（写真20）。第二面は、成田詣での帰路、野犬に襲われた貞奴の乗馬が、前足を空にあがいていななく場面（写真21）。不動明王を念ずる貞奴と、たまたま行き合わせて助けた桃介との、遠い日の出会いがそこには秘められています。第三面は、「奴」時代に、宵闇の箱根山中で悪漢に囲まれ、危うく難を逃れた場面（写真19）。第四面は、馬術競技に出場し、柳に母衣を引っかけて落馬したものの、無傷だった場面。第五面は、音二郎と小舟で相模灘を漂い、下田に漂着した場面。第六面は、鳥羽沖でアシカに追われ、貞奴が舳先で両手を合わせて拝んでいる場面（写真22）。第七面は、ヨーロッパ巡業の支度金を、神戸で人力車中に置き忘れたものの、不動明王の加護で戻ってきた場面。そして、最後は、大正13年（一九二四）、桃介の大井ダム工事の現場で、完成を記念する貞奴の頭上に不動尊の後光が差している場面です（写真23）。

これらは、貞奴の自伝であり、貞奴がここに取り出したのは、過去60年の栄光の歴史ではなく、危難の歴史でした。短い詞書きが添えられていますが、欧米で博した女優・貞奴の名声には、一言も触れられていません。

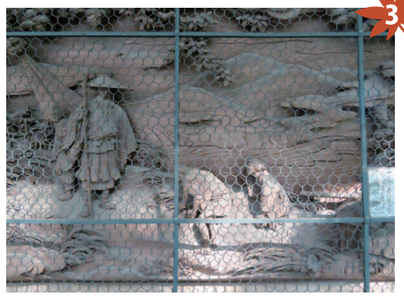


写真19　八霊験絵図 3
（本堂胴羽目「箱根山中落下狼藉の図」）
貞女十九歳の時箱根山中の宵闇悪漢に囲まれ落花狼藉と思われし時、不動明王の威徳忽然一名の普化僧を現わし怪漢を追い給う。

写真21　野犬に襲われるの図
成田遠来の途、貞女を乗せし奔馬、野犬の群れに襲われて絶壁に追い詰められし時、不動明王を念ずれば不思議やアワヤと云う瞬間後退して難を免がる。

写真20　水垢離之図
養母病魔に臨み十二歳の貞女酷寒の深夜、水垢離を取り尊號を念珠して、其快癒を不動明王に縋るや霊験忽ち難病を治す。

八霊験絵図（成田山貞照寺蔵）

写真23　大井ダム完成の図
大正十三年頃、木曽川を横断してダムを築き水力電気を起こさんとする福沢桃介のため一身犠牲の念願を籠め、空前の難工事を完成せしむ。

写真22　アシカの群れ襲来の図
貞女夫妻志州鳥羽沖舟行中海驢嶋付近にて海驢の群れに襲わる。専念不動明王を念祈して防げば、怪獣仏威に打たれて去る。

3. 川上家別邸「萬松園」

貞照寺に参詣する別荘として、大井ダムにつながる風光明媚な木曽川のほとりに、京都から銘木を集めて、貞奴が「萬松園」の建築を始めたのは、昭和4年（一九二九）4月のことです。名前は、以前に茅ケ崎に建て、後に人手に渡った「萬松園」と同じとしました。建物登記謄本によれば、萬松園は同年に完成したようですが、内装や建具、数々の装飾に手間をかけ、すべてが完成したのは昭和8年（一九三三）のことです。

萬松園は、敷地面積千坪以上で、主屋は一部二階建ての建坪百五十坪、部屋数は26にも及ぶ豪奢な数寄屋造りです。萬松園を訪れた者は、皆一様にその贅の限りを尽くした造りに息をのみます。

広い邸の中で、一番格式の高い部屋の襖に、貞奴は『木曽桃山飛泉』と銘打たれた成木星州作の南画をあてました（写真24）。この絵は、桃介の名前をとって名付けられた「桃山発電所」にある、隠れ滝「桃之滝」です（写真25）。絵の師匠でもある画伯に、貞奴は「書院の襖にぜひとも描いていただきたい場所がございます。」と言ってこの絵を頼みました。貞奴は、自分が愛したこの滝を、萬松園の四本の襖に再現したいと考えたのです。そこからは、木曽川電力開発に人生をかけた桃介への思いが感じ取れます。そして同じ部屋の二本の襖には、同じく成木星州作の『寝覚の床』が描かれています。

この部屋の他にも、中国風の部屋、床がタイル張りになっているサンルーム、木曽川に向かって「流水に紅葉」の透かし彫り欄間がある小室、天井に羽衣をまとった天女が舞いながら散華をしているさまが描かれている仏間などがあり、襖を開けるたびに、人は異次元の世界に入り込んだような気分になります。

萬松園は貞奴の美意識が感じられるだけでなく、建築史から見ても貴重な建造物であると言えます。当時のお金で、十五、六万円もかけた立派なものでした。

貞奴愛用のワゴン（萬松園蔵）

桃介揮毫の表札（成田山貞照寺蔵）

写真25　桃山発電所の隠れ滝「桃之滝」
（関西電力株式会社東海支社提供）

表門で微笑む貞奴（川上新一郎氏提供）

写真 24　襖絵『木曽桃山飛泉』　成木星州作（萬松園蔵）

4. 晩年の貞奴と桃介

桃介は晩年、一度だけ鵜沼を訪れ、貞照寺を詣でました。そして、しばらく萬松園に滞在して帰りましたが、これが桃介の最後の参詣となりました。

昭和13年（一九三八）2月15日、桃介は渋谷の邸で永眠しました。遺骸は多摩墓地に埋葬され（写真26）、貞照寺の本堂に「大乗院蘇水桃介居士」という位牌が納められました（写真27）。

貞奴は東京の牛込河田町に住み、1・5・9月の28日、不動尊の縁日ごとに萬松園に滞在しました。宝積寺から名鉄新鵜沼駅までは、近くの花屋がリヤカーを引いて迎えに来て、座布団を敷いて乗って行きました。

貞奴は稀に朝早く木曽川に釣り船を浮かべることがありました。近くに住む船頭に頼んで舟を出すのですが、貞奴は魚を釣るでもなく、黙って川面を眺めていました（写真28）。そして、一週間から10日ほど滞在すると、東京へ帰って行きました。

昭和19年（一九四四）、東京では米軍の空襲にそなえ、学童、老人の強制疎開が始まりました。貞奴は姪の小山ツルとツルの養女・玉起とともに萬松園に疎開してきました。当時子どもで、萬松園の近くに住んでいた女性は、「遊んでいると、よく貞奴に『お嬢ちゃん、お嬢ちゃん』と呼び止められ、お菓子をもらった。」と話しています。

疎開中の昭和20年（一九四五）4月、河田町の家は戦災で全焼しました。終戦後、同年12月に人手に渡るまで、貞奴は萬松園で過ごしたといいます。

昭和21年（一九四六）、貞奴は体調を崩し、療養のため熱海の別荘へ移りましたが、同年12月7日、肝臓がんで息を引き取りました。享年75歳でした。戒名は、「貞照院孝順至道大姉」です。遺言により、貞奴の遺骨は三回忌に貞照寺北側の山腹の霊廟に納骨され、干支の羊に護られて眠っています（写真29）。

写真 26　桃介の葬儀（成田山貞照寺提供）

写真27　貞照寺に納められている貞奴と桃介の位牌

写真 28　木曽川で川遊びをする貞奴
（川上新一郎氏提供）

霊廟の前に立つ貞奴（川上新一郎氏提供）
貞奴は生前に自らの霊廟を建立した

写真29　貞奴の霊廟
霊廟は、桃介との思い出を懐かしむように木曽川上流を向いて建てられている

日本初の近代女優が、各務原を終焉の地としたのは

貞奴は晩年、人生の集大成として、各務原鵜沼の地に「貞照寺」と「萬松園」を建てました。これだけの建造物を一個人が建てるというのは、たとえ財力があったとしても、貞奴自身の強い思いがなければできることではありません。

それでは、東京生まれ、東京育ちで、国際的な女優として活躍した貞奴が、なぜ各務原鵜沼を自らの終焉（しゅうえん）の地としたのでしょうか。それはこの地が、桃介が建設した発電所とつながる木曽川の景勝地だったからではないかと考えます。

「木曽川を離れて福沢氏なく、福沢氏を離れて木曽川開発なし」と言われた木曽川電力開発事業は、桃介が人生のすべてを賭けて取り組んだ壮大なる事業でした。貞照寺の八霊験絵図の最後の絵には、大井ダムの完成を一心不乱に祈る貞奴の上に不動明王の後光が差す様子が描かれています。木曽川電力開発事業の最大の難工事であった大井ダム建設は、桃介だけでなく貞奴の悲願でもありました。この事業の成功により、桃介は「電力王」と呼ばれ、日本の近代化は加速しました。貞奴の人生の中でも、この時期が最も充実していた時期であったと思われます。

貞照寺や萬松園には、桃介や桃介が水を電力に変えた木曽川の風景がちりばめられています。そこからは、桃介と桃介が愛した木曽川への貞奴の強い思いが感じられます。

この地を最初に気に入ったのは桃介でした。貞奴もこの地を同様に気に入り、後に桃介から買い取ったのでしょう。そして、桃介と桃介がその情熱の全てを注ぎ込んで開発した木曽川に対する貞奴の愛情は、深いものであったに違いありません。だからこそ貞奴は、木曽川のほとりにある景勝地、各務原鵜沼を終焉の地としたのではないでしょうか。

日本における女優の地位を確立し、桃介と共に日本の近代化に大きな功績を残した川上貞奴は、閑静な各務原市鵜沼宝積寺の貞照寺に今も安らかに眠っています。

【協力・資料提供】
成田山名古屋別院・貞照寺／(株)創寫館・森田満夫氏／財団法人茅ケ崎市文化振興財団・茅ケ崎市美術館／文化のみち二葉館／関西電力(株)東海支社／南木曽町博物館／岐阜土地興行(株)／川上新一郎氏／横山信治氏／仲谷甚作氏／曽我公平氏

木曽川と萬松園

発行　各務原市教育委員会
編集　各務原市歴史民俗資料館　〒504-0911 岐阜県各務原市那加門前町3丁目1番地3 市立中央図書館3階　TEL 058-383-1361
スマートミュージアム Kakamigahara